

仏典解説講座

【華嚴經】

無限の世界観

鎌田 茂雄

一

京都・洛北の景勝地、高雄の一角、背後に鬱然たる杉木立を背おい、清冽な清滝川の流を前にして、鎌倉時代、明恵上人が復興した高山寺の静かなたたずまいがある。明恵上人は一生不犯の高僧であり、華嚴教学の勝れた研究者であるとともに、幕府権力に対して一歩も妥協することのなかった高潔な人格者であった。彼は華嚴經を生きた信仰の対象として把握し、仏光三昧觀という実践行に徹した究道者でもあった。この明恵上人よりやや遅れて輩出したのが、東大寺の凝然大徳である。彼は『八宗綱要』『三国仏法伝通縁起』など、八宗兼学の大学者であったばかりでなく、華嚴教学の集大成者でもあった。彼の著『法界義鏡』こそは、日本人の生んだ勝れた華嚴学概説である。凝然は華嚴經を研究することが、すなわち行である、という行学一如に生きた人であった。『法界義鏡』を著わすにあたり、華嚴經の一文一文を仏陀の言葉として受けとり、ひとことの私語をはさむことなく、華嚴經、および法蔵の『探玄記』、澄観の『演義鈔』を讃仰し、引用したのであった。鎌倉時代、旧仏教の祖師方の精神には、華嚴經に対する信仰と、華嚴学の研鑽とが一つになって力強く生きていたのであった。このように日本の鎌倉時代にまで生きた華嚴經は一体何を主張し、何を説こうとしたのか、華嚴經のめざした精神についてのべてみよう。

二

華嚴經は大乗仏教の代表的經典としての『法華經』とともに、大乗仏典の雙璧をなすもので、その根幹となる『十地經』や『入法界品』は、竜樹以前に成立したものとされているが、現存の六十華嚴經や八十華嚴經が編纂されたのは、かなり時代がおくれ、編纂の場所もインドではなく中央アジアのコータン（Khotan, 于闐）といわれている。六十華嚴は(1)寂滅道場会、(2)普光法堂会、(3)初利天会、(4)夜摩天宮会、(5)兜率天宮会、(6)他化自在天宮会、(7)普光法堂会、(8)逝多林会の八会座からドラマが構成されている。この八会はさらに三十四品に分けられているが、最も有名なのは、ボサツの修行の段階を説いた「十地品」と仏の命の現われを強調する「性起品」と、善財童子の究道過程を説いた「入法界品」である。

華嚴經はインド文化圏において成立したものであるから、インド思想史やインド文化に対する深い理解がないと、正確に理解することはできない。入法界品の英訳を何とかしないと死にきれぬ、といわれた鈴木大拙博士が「大乗思想の最高潮に達したもので、印度的表現形式の巧妙を極めたものを華嚴經とする」(『東洋的一』)といわれたことは銘記すべきであろう。さらに鈴木博士がインド、中国、日本の仏教の特質をとらえて、知性的、実践的、靈性的というようにのべられたが、インドの仏教は般若の知性によってうらうちされ

ており、華嚴經のなかにも般若は生きている。般若の智は愛欲を空ずることによって、大悲となって実践性をもつわけであり、智と悲によって華嚴經の壮大なドラマは構築されているといつてよい。われわれが華嚴經をひもとくと、そこには限りなき光明に包まれ、莊嚴をきわめた世界の様相が、いたるところに、くりかえし説かれている。そのきわまりなき高遠雄渾の思想はわれわれをして亡羊の嘆をいだかしめる。われわれの感覚からすれば、いったい何をいおうとして、このようにくりかえし、反復し、一見空想的にみえるような描写によって、仏や世界を莊嚴するのか、理解に苦しむ。華嚴經のほんとうの名前は『大方広仏華嚴經』(Mahā-vaipulya-buddha-avatamsaka-sūtra)であるが、大方広とは仏につけた形容の言葉で「広大なるほとけ」という意味であり、法華經が「法」を説くのに対し、華嚴經は「仏」を説くのである。それは人間的な感覚や、人間の小さな悟性によって理解できる程度の矮小化された仏を説くのではなく、時間的にも空間的にも無限であるような仏を説く。それはわれわれの分別智を越えた無分別智によってとらえられた仏でなければならぬ。

華嚴經に現われた無限広大な世界観はたんなる夢物語や空想の世界ではない。宗教体験にうらうちされた宗教的実在である。華嚴經は海印三昧という宗教的体験のなかに入った仏陀の正覚の内容を説いたものである。仏の正覚は生きとし生けるものの浄眼を開くとともに、世界万有を莊嚴する。正覚の立場にたてば、客観的な事実の世界も、たんなる客観的世界ではなく、それはそのまま悟りの領域に転じる。現実の世界が真理の領域としての法界に転じてゆくところに『華嚴經』の世界は開かれてゆく。

仏の正覚にもとづいて華嚴經の世界観が成りたつといたが、この仏の正覚とは、われわれ人間世界を離れた超越的な天国をいうのではない。凡夫に即して現成している世界をいう。華嚴經のなかには、「浄心こそ諸仏を見る」(菩薩雲集讚偈品)という言葉があるが、われわれの心が浄らかな仏心になりきるとき、仏を見ることができるのである。なにも見仏の体験とはむづかしいことをいうのではない。心を浄らかにすることなのだ。それでは浄心になりきるにはどうしたらよいか。それは自我を空ずることだという。それについて華嚴經では、

一、すべてのものは、かりに因縁によって成り立っているものにすぎないから、ものの本性は空なるものである、ということが理解できれば、仏を見ることができる。(唐經、須弥頂上偈讚品)

二、すべてのものは、本来空なるものである。ゆえにすべてのものは滅することもない。このことを悟るならば、仏がつねに現われていることになる。(晋經、菩薩雲集妙勝殿上説偈品)

三、ものの本来的あり方を見ると、それは空であって、とらえることも、これが空だと見ることもできないものである。本来、空なるものであると知れば、それがすなわち仏なのである。(唐經、須弥頂上偈讚品)

などと説かれている。

三

華嚴經の構想する世界像は広大無辺であり、時間的にも空間的にもその限定をこえている。これほど雄大な世界像を創造した民族は他にないのではないか。

華嚴經の一章「盧舎那仏品」を見ると、世尊が口および一つ一つの齒の間から、無数の光明を放って、十方の世界を照らし、その光に照らされたボサツ衆は、蓮華蔵世界を見た。その蓮華蔵世界のまわりには、無数の世界が存在し、その一つ一つの世界の中には、おのおのの仏が安座している。さらに一つの蓮華蔵世界を中心として、無限の蓮華蔵世界が、おのおのの仏を中心として存在している。

普賢ボサツは蓮華蔵世界の風光について、「この蓮華蔵世界海においては、一々の微塵の中に、一切の法界を見る」と云っている。ここで蓮華象世界海といっている海とは、アラビヤ海やインド洋のような大海を意味するのであろうが、それはあくまで比喩的に述べられているのであり、大洋のような広大無辺のものが、仏を中心として一つに結び合うところの集団の意味を表わしている。華嚴經でいう世界海を大宇宙にたとえていえば、いくつかの惑星が集まって太陽系が構成され、太陽系を初めとする、その他の星の集団によって、銀河系宇宙が構成され、さらに大宇宙が成立しているように、世界海も無限の小宇宙の集まりから成り立っている。これらの世界海を中心となるのは、もちろん蓮華蔵世界海であり、そこには無量の蓮華や、真珠の宝や、摩尼の珠などによって荘嚴され、須弥山を初めとし、河・樹木・樓觀などが存在し、香水海に包まれ、空には光明焰雲がたなびいている。まことに、人知の考えうるかぎりの美しく荘嚴された世界像を描いている。人間も山も川も一切をそこに映しだした世界海は「無限」という言葉であらわす以外にはない。このような広大無限な世界海の中に映しだされている一切のものは、たがいにあいかわり合い、大きな調和と融和のなかに生きてゆく。そのなかに存在する無数のものが、たがいに他を侵すことなく、たがいの存在を認め合い、一つとなって全体を包んでゆく。

この華嚴經が説く世界海の中にあるすべてのものは、それぞれのもっているすべてののはたらき 全機 を力いっぱい表わそうとする。この世界に存在する個物はどんな小さなものであっても、それ自身絶対でなければならぬ。一塵といえども動かすことができぬ。史かもその一塵が全宇宙を包含しているというのは、まさにこのことをいっているのである。絶対に動かせない、絶対に欠如できない、もしそれを少しでも動かしたならば、真実の世界でなくなるのだ。道元禅師が、

また心境ともに静中の証入悟出あれども、自受用の境界なるをもて、一塵をうごかさず、一相をやぶらず、広大の仏事、甚深微妙の仏化をなす。この化道のおよぶところの草木土地、ともに大光明をはなち、深妙法をとくこと、きはまるときなし。

(正法眼蔵、弁道話)

とのべているが、華嚴の法界の実相を端的にあらわしているといつてよい。

四

華嚴經においては、「信」の意義が強調される。「信はこれ道の元にして、功德の母なり」

(賢者品)といい、「初めて心を発す時に、すなわち正覚を成ず」(梵行品)ともいう。信を道の根本とする考え方は、仏教の基本的な思想であり、『大智度論』では、「仏法の大海は信をもって能入とする」と説いている。道元は『学道用心集』のなかで、

仏道を修行する者は、先づ須らく仏道を信ずべし。仏道を信ずるとは、須らく自己、本より道中に在りて、迷惑せず、顛倒せず、増減なく、誤謬なきことを信ず。かくのごときの信を生じ、かくのごときの道を明らめ、依りて之を行ずるは、乃ち学道の本基なり。

とのべている。仏道を信ずるとはどういうことかということ、自分は本来、仏道の真只中であって、迷いもせず、惑いもなく、そこに安心を決定しておけば、修行をしたからといって自己のいのちは増すわけのものでもなく、煩惱がおこったからといって、自己の価値が減るのでもないのだ、という絶対信の中に安住することが「信」の本質であるといっている。

絶対信に安住するからといって、修行が不必要なのではない。絶対信は無限の求道をうらうちするものであると同時に、無限向上の求道こそ絶対信を証するものである。華嚴経の「入法界品」では、善財童子の求道物語が説かれる。善財童子の求道物語は、中国の南北朝期末から隋代頃より、多くの人々に深い感銘を与え、絵巻物となって求道者の模範的人間像としてえがかれている。

善財童子は、海師・長者・婆羅門・外道・道場地神・天・夜神・仙人・比丘尼・女性など五三人の善知識を訪問した。女神・女性が二十人もいることは注目に与する。人間の価値は出家や在家などの外形の区別によるのではなくて、ただ菩提心の有無によるのであるという華嚴経の思想をあらわしている。

多くの善友を尋訪した善財童子は、最後に弥勒・文殊・普賢の三ボサツを尋ねて、ボサツ行を求めるのに必要な心がまえを問うのであるが、それについて弥勒は「浄らかな真心と知恵が大切である」と答える。ついで菩提心とは、諸仏の種子であり、良田・大地・浄水などである点を一一七カ条にわたって説明した。善財童子は弥勒ボサツに対して合掌して、「唯、願わくば、大聖、楼観の門を開き、我をして入るを得しめよ」と願をかけるや、弥勒の弾指によって門は開かれ、善財童子は門の中に入り、華嚴法界を見ることができた。さらに善財童子は普門城において文殊ボサツに会い、最後に蓮華蔵師子座にいる普賢ボサツの不可思議なる自在神力を見て、不可壊の知恵を体得する。かくて善財童子は仏とまったく等しい能力、すなわち一切の世界に充満し、正覚を得、自在力に達し、無礙の力を具得し、大慈悲心に住ることができた。善財童子の求道こそ、華嚴経に現われた人間像であり、無限向上の道を歩みゆく姿といわねばならない。

五

華嚴経の核心は、善財童子が楼観の門に入ったという無分別智の体得と、生きとし生けるすべてのものが円融無礙なる関係を保つことを可能ならしめる大悲の行願にある。智と悲は大乗仏教を一貫する思想的特質であるが、華嚴経は大智と大悲の相即不離なる二大支

柱をあますことなく説いている。鈴木大拙博士が「われわれが華嚴経を理解しようと願ふ時、われわれのなさねばならぬ大切な事は、先づその根本的直覚を把握することである」（鈴木大拙全集第五巻、二一三頁）と言われたことは華嚴経における大智を理解する前提である。また今は亡き末綱恕一博士は華嚴経における大悲と大智の問題を一貫して追及されたのであった（「大悲と無分別智」印度学仏教学研究一八 - 一）。

華嚴経は、中央アジアを経て、中国に伝えられ、六十巻、八十巻の華嚴経として訳され、されにそれにもとづいて、中国の華嚴宗が成立し、ついで奈良時代には、華嚴経の理念にもとづいて東大寺の大仏が造営されたのである。鎌倉時代にも、梅尾の明恵上人や、凝然大徳によって華嚴思想は深められ、日本の思想の中に深く浸透したのである。鈴木博士が「それは単なる大乘仏教哲学といふことでなしに、世界思想史上の一期を劃するものとして、華嚴を見なければならぬ」（『華嚴の研究』序文）といわれている如く華嚴経の思想は、たんなる大乘仏教の一思想というばかりでなく、世界性を持ち得るものといえよう。

参考文献

華嚴経の思想を平明に説いたものとしては、坂本幸男『仏陀の智慧 - 華嚴経講話』（平楽寺書店、昭和三一）、末綱恕一『華嚴経の世界』（春秋社、昭和三二）、玉城康四郎『永遠の世界観・華嚴経』（筑摩書房、昭和四〇）、鎌田茂雄・上山春平『無限の世界観・華嚴』（仏教の思想六、角川書店、昭和四四）などがある。なお華嚴経に関する論文集としては、川田熊太郎・中村元編『華嚴思想』（法蔵館、昭和三五）がある。なお華嚴経および華嚴学に関する典籍・参考文献については、同書巻末附録「華嚴学の典籍および研究文献」を見て頂きたいと思う。